

多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン
取組の概要と推進委員会からのコメント

整理番号	8
------	---

申請担当大学 (連携大学)	岡山大学(計11大学) (愛媛大学、香川大学、川崎医科大学、高知大学、高知県立大学、徳島大学、徳島文理大学、広島大学、松山大学、山口大学)
プログラム名	全人的医療を行う高度がん専門医療人養成
事業推進責任者	藤原 俊義(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授)

取組の概要

本事業は、高度ながん治療の専門性を有すると同時に全人的医療を高度なレベルで実践できる人材を育成する中国・四国地方全域の大学院・がん診療拠点病院が連携した教育プログラムである。各施設の特徴と患者会との連携を生かしゲノム医療・高齢者・小児・希少がん・全人的医療の領域において高度なレベルで標準化された共通コアおよびeラーニングによる域内統一カリキュラムを設計し、評価修正を行い、大学間連携と拠点間連携による大学、分野、職種を越えた専門職教育を行う。英語教育と海外先進施設との連携により国際的に活躍する人材の養成とFD研修、地域医療機関との連携により在宅・緩和・高齢者がん医療に貢献する専門医療人の養成を行い、CNSの高齢者・在宅医療リカレント教育と在宅看護・口腔ケア・栄養専門職の人材育成を行う。地域のがん啓発、教育を行いソーシャルキャピタルを形成するとともにミャンマー、台湾での人材育成にも貢献する。

推進委員会からのコメント ○：優れた点等、●：改善を要する点等

- 次世代型の専門性の習得と、全人的医療を学ぶチーム医療の推進を両輪とし、11大学の役割分担と事業実施体制も明確に位置づけている。さらに、地域の医療機関や在宅クリニック、看護、薬局などとの連携など、全体構想に沿うよう各コースのプログラムに工夫がみられる点も多く評価できる。
- 広い地域の大学が参加し、e-learningを活用した中国四国地域域内統一カリキュラムの導入、本プログラム修了者の域内就職を促進することによる地域がん医療の均てん化を目指すという点が評価できる。
- 患者・家族を社会にある教育資源として捉え、患者・家族の教育カリキュラムへの参画を計画していること、また、キャリア支援において休職看護師の復職支援プログラムを計画していることは評価できる。
- 19ものWGを立ち上げることは、事業の確実な遂行に寄与することが予想される。
- 「全人的医療」というプラン全体のキーワードが、各大学での取り組みにどのように反映されるのか、また大学間での具体的な連携がどのように行われるのかをより明確にする必要がある。
- 新規性、独創性については一般的な内容に留まっており、より地域性を活かした特長を訴える内容とすべきである。
- 重複領域では絞り込みを行い、大学間の教員相互乗り入れや教育資源の共有・有効活用などについても検討する必要がある。
- インテンシブコースでは、e-learningやセミナー、講習などが企画されているが、履修効果を測定し、習得度を評価することを含めるべきである。
- 補助期間終了後も本事業を確実に継続するための計画を具体的に検討する必要がある。

多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン
取組の概要と推進委員会からのコメント

		整理番号	9
申請担当大学 (連携大学)	九州大学(計10大学) (福岡大学、久留米大学、佐賀大学、長崎大学、熊本大学、大分大学、鹿児島大学、琉球大学)		
プログラム名	新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン		
事業推進責任者	住本 英樹(九州大学大学院医学研究院長)		
取組の概要			
<p>本プランはこれまでの10年に及ぶ九州内の医療系大学との継続的ながん教育連携を基盤とし、九州大学の九州連携臨床腫瘍学講座が10の大学院・関連医療機関等と密接に連携し九州内の多様な新ニーズに対応するがん専門医療人を養成する。また長崎大学の臨床腫瘍学分野、鹿児島大学の臨床腫瘍学講座が九州内連携の要となり、特にライフステージに応じたがん対策を推進する多職種人材養成を行う。当該講座には専門の教員を配置し、各大学病院内の小児がん医療部門、希少がん部門、ゲノム医療関連部門等との強力な連携に基づく実地教育を行う。対面講義・研修等に加え遠隔通信等も利用し広域にわたる大学連携を機能的に実現させ、新ニーズに対応した多職種連携教育の構築・情報発信を行う。またゲノム医療や小児・希少がんに対する海外の先進事例を積極的に収集し発信することで本プランのみならず我が国におけるがん専門医療人の養成に寄与する。</p>			
推進委員会からのコメント ○：優れた点等、●：改善を要する点等			
<p>○事業の実施体制、年度別の計画が具体性を持っており、実現可能性を示唆している。九州全領域をカバーする上で、九州大学、長崎大学、鹿児島大学がエリア代表校となることで事業の集約を行うなど、プロジェクトのマネジメントが効果的になるように工夫されている。</p> <p>○各大学のコーディネーターや連携医療機関の代表者で構成される「事業運営推進協議会」を設置し、年2回の頻度で開催を予定するなど、事業の推進や継続的な事業展開に係る実効性を持った体制を整備することとしている。</p> <p>○地域の特性を踏まえた上での総合的ながん対策を担う人材養成が想定されており現実的である。特に、離島、僻地のがん対策についての着眼点は独自性が高いだけでなく、社会的必要性も高く評価できる。</p> <p>○取組の質を高めるため、「拠点間リトリート」において他拠点グループとの連携が予定されている。</p> <p>●連携大学との教育・研究の情報共有方法を明確にする必要がある。</p> <p>●拠点間リトリートの開催は有用と思われるが、トピックによっては医療事情や社会事情が異なるので、地域性を考慮し、相互にメリットが得られるよう工夫が必要である。</p> <p>●事業の実施体制において、実施に関わる教員数が著しく少ない。</p> <p>●ライフステージ領域において、多様性への配慮や将来を見据えた難治性苦痛の緩和、サバイバーシップなどの焦点化された先駆的な取組が乏しい。</p>			

取組の概要と推進委員会からのコメント

整理番号

10

申請担当大学 (連携大学)	札幌医科大学(計4大学) (北海道大学、旭川医科大学、北海道医療大学)
プログラム名	人と医を紡ぐ北海道がん医療人養成プラン
事業推進責任者	塚本 泰司(札幌医科大学学長)

取組の概要

近年のがん診療ではゲノム情報の重要性が高まり、これまで十分ではなかった希少がんや小児・AYA世代のがんに対する対応が求められるなど、新時代の医療、患者の視点に立った多様なニーズに応える医療の必要性が高まっており、こうしたがん医療を担う人材の養成が急務である。また、広大な北海道においては、患者がそれぞれの地域での生活を営みつつ質の高いがん医療を受けることを可能にするため、医療の機能集約と均てん化の両立が求められる。

本プログラムでは北海道内の医療系大学が先進的に進めている遺伝医療、がんゲノム医療、遠隔医療、多職種連携診療の英知を結集し、道内の中核医療機関とも連携して、大学院生はもとより地域の医療機関で研修する医師やがん診療にかかわる医療従事者に高度な専門教育を提供し、地域横断的、専門職横断的、臓器(がん種)横断的な包括的がん医療を担う人材および次世代のがんゲノム医療を担う研究者を養成する。

推進委員会からのコメント

○：優れた点等、●：改善を要する点等

- グループ内での意思統一が行われており、目標に向けて効率的な連携体制の構築や機能的なプログラムが計画されている。
- がんサバイバーによる講義の新設は、がん診療において多面的に有用と期待される。また、がんサバイバーなど関連団体との評価体制の構築等の共同活動は、社会医学の面からも評価できる。
- グローバルな視点から、院生の海外留学支援やアジアへの視察やアジア留学生受け入れは、事業の国際性に鑑みて有効である。
- 女性研究者の支援、女性教員の人材養成ボードへの参画など、キャリア教育への注力は今後のがん医療環境構築に貢献が期待される。
- インテンシブコースの養成人数が3,440名とされるなど、医療過疎地を含む北海道においてがん医療の向上に繋がり得る効果が期待できる。
- インテンシブコースの内容について、課題をより具体的に抽出したきめ細かいプログラムとなるよう検討する必要がある。
- 質的目標達成のために、大学院生や患者など当事者団体にアンケートによるフィードバックからプログラムの改善改良を目指すようであるが、アンケート内容が多岐・多彩と思われ、その実施と分析には一層の工夫と効率性の検討が望まれる。
- 北海道における癌死減少を意識したゲノム医療のインフラ・教育・啓蒙などについて短期的、長期的展望の検討が望まれる。
- がん患者の就労や、島嶼・山間部など医療過疎地へのがん実地医療やがん教育などの視点のほか、老年医学的視点も加えた高齢者の特性に関する教育体制構築についても検討が望まれる。

多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン
取組の概要と推進委員会からのコメント

整理番号	11
------	----

申請担当大学 (連携大学)	近畿大学(計7大学) (大阪市立大学、神戸大学、関西医科大学、兵庫医科大学、大阪府立大学、神戸市看護大学)
プログラム名	7大学連携個別化がん医療実践者養成プラン
事業推進責任者	中川 和彦(近畿大学医学部内科学腫瘍内科部門教授)

取組の概要

本プランの目的は、阪神地区の国公立7大学9学部の医学、看護学、薬学、理工学系大学院研究科が相互連携し、多様化する新ニーズに対応した個別化医療を実践できるがん専門医療人を養成することである。目的達成のために、3つのタスクフォース(TF)を立ち上げ、ゲノム医療、希少がん及び小児がん、ライフステージに応じて生じる様々な課題等に対して取り組む。「TF1ゲノム・サイエンス」では、ゲノム医療を構築し連携大学間及び産学官共同研究を推進する。「TF2教育イノベーション」では、個別化医療を実現するための革新的な教育プログラムの開発を促進する。「TF3マルチパートナーシップ・アライアンス」では、地域医療機関、自治体・公的機関、がんサバイバーを含む患者会、NPO法人等との連携・支援体制を強化する。各タスクフォースが有機的に連携することによって、患者中心の個別化医療を実践できるがん専門医療人が養成される。

推進委員会からのコメント ○：優れた点等、●：改善を要する点等

- 多様な学部の連携によって、教育コースの種類が豊富かつ独自性のあるプログラムとなっている。
- ゲノム医療、希少がん・小児がん、異なるライフステージに事業内容が分類され、それぞれの課題、方向性が明確化されており評価できる。
- がん領域の認定遺伝カウンセラー養成を強力に推進するプログラムは実効的なものとなっており、評価できる。
- がん治療のみならず、不足しているサバイバーシップ、緩和治療専門医、ペインクリニックの専門職の養成に焦点化した具体的な計画となっており評価できる。
- キャリアパスやキャリア形成、男女共同参画、ワークライフバランスについて、具体的な計画が示されている。
- ゲノム医療展開に重要となる分子病理医や老年医学的視点も加えた高齢者の特性に関する教育体制などの構築について、検討が望まれる。
- 国際競争力を有する人材の育成を目指すのは意欲的であるが、より具体的な育成プランの明示が必要である。
- 年度別の計画における取組の実施時期を明確化する必要がある。